



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



新設！ロシア語オンラインクラス

新型コロナウイルスの感染予防のため、3月より全てのロシア語クラスを中止せざるを得なくなった。当初は1ヶ月ぐらいで再開できるかと思っていたら、4月7日には緊急事態宣言が出され、人と会ってはいけない社会になった。テレビのキャスターがオンラインで別の場所から出演し、画面の中に画面が並ぶような今まで見たことのない光景を目にするようになった。ロシア語クラスも何らかの対応が必要となった。

協会のロシア語の先生方、ナターリア先生・イローナ先生・ウラジーミル先生・スニコ先生・オクサーナ先生のご協力により、5つのオンラインクラスがスタートし、学習を待ち望んでいた参加者が集まった。最初に、テーマ別クラスを、次に岩本が所属する中級クラスを4月中旬から試行的に開始した。

つい1~2ヶ月前の私たちはオンラインで人が集まることには慣れていなかったし、機械を通して聞こえる声で語学学習ができるのかと不安だった。最初にSkypeで集まってみたときには少々の接続トラブルはあったが、お互い助け合い全員が顔を合わせることができた。やってみると心配した程ではなく、画面越しでも顔を見て話せるので会っているかのようなのである。また、オンラインにしたことにより、大阪在住の方が仲間入りしたことは、大変嬉しいことだった。現在も、会わずに連絡しあい、会わずに新しいことを始めるという試みがたくさん行われている。同じ目的を持って協力すれば出来ると思った。

ロシアの知り合いにも状況を少し聞いたところ、ウラル地方のチェリャビンスクでは、4月中旬に大学の講義がオンラインになっているとのことだった。エカテリンブルク在住の日本語の先生によると授業はすべてZoomで行っているとのことだった。学校規模で全員が足並み揃えて移行できるというのは素晴らしいと思う。

らしいと思う。全ての家庭でオンライン環境が整っているのだろうか。何より学校が方針をはっきり示しているのだろうと思う。

中級クラスではオンラインになってから、シリーズで早口言葉をやっている。発音の練習になるので、私は紙に書いて冷蔵庫に貼って覚えている。ロシア語を聞いたり話したりすることは運動のようなもので、やらないと衰える。オンラインで継続することができて良かったと思う。新型コロナをきっかけとしてオンラインクラスが立ち上がった。今後の継続も考えていきたい。(岩本智子)

テーマ別クラス「ロシア語でおもてなし」では、2月22日の最初の授業で新型コロナウイルスの影響が出て3名しか集まらずに中止を余儀なくされた。そこで、オンラインに切り替える方向で相談したところ、Skype、Zoom、Webexやメッセージ等の中ではスカイプならみんな慣れているという話になり3月にテスト。オクサーナ先生を中心に4月から週1回の授業をスタートした。

内容はタイムリーなところで自粛の言い方や過ごし方の表現から、文学をテーマにアクーニンの作品の一部を読んだり音楽をテーマにしたりと楽しい授業だった。書き込みができるので作文もその場でチェックしてもらえ。授業の直前にテキストが送られてきて、少しの間その日のテキストに目を通して準備ができる。

テーマ別ロシア語は6月までオンライン授業だが、一般の希望者を広く受け入れるために、田町のリーブラが再開すれば7月からはまた教室形式に戻す予定にしている。

スニコ先生のクラスは元々先生の生徒だった学生等の希望で声がかけて5月半ばから始められた。通常のクラス同様、会員であることが原則で、通うのが無理な生徒も含めて今後もオンライン授業が基本になる。広汎な知識と、普段からネット利用もふんだんに取り入れて多様な教材を使う先生なので、楽しい授業となるだろう。

オンラインでは、個々のPCの具合で時にはアクシデントも起きるが、遠方の会員の方でも参加できるというメリットがある。今後は2本立てで継続していければと思う。(千葉麻里)

*オンラインクラス受講希望者をご連絡ください。レベルによりクラスをマッチングします。個人レッスンとなる場合もあります。

お知らせ

●第69回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2020年7月5日(日) 13:30~16:00

講師：菅野エレナ

場所：田町「リーブラ」2階、造形表現室

会費：3,000円(お好きな教材1セット、お茶代含む)

*リーブラフェスタの展示会は延期になりました。

●ロシア語クラス

*オンラインクラス実施中。受講希望者をご相談ください。

**事務所教室は7月から再開予定です。

●テーマ別ロシア語 続「おもてなしロシア語」

日時：7月12日、26日、8月2日(日) 13:30~16:00

講師：オクサーナ・ピスクノワ

授業料：会員7,000円、一般8,000円

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel : 03-5563-0626 Fax:03-5563-0752

E-Mail:nichiro@nichiro.org

*自粛が解除に向かっておりますが事務所をお休みにさせて頂いている日がございます。お問い合わせ、お申し込みはできるだけFAXかメールでお願いいたします。

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

振込先：郵便口座00160-9-66486、加入者：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局E-Mail:nichiro@nichiro.org
Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752

リャザン留学記②

学生寮での思い出

長島 さくら

こんにちは。昨年の交流紙5月号にて一度留学記を書かせて頂いた、長島さくらと申します。私は、2018年夏からリャザン国立大学で私費留学をしていました。本当は今年の夏までいる予定だったのですが、今回コロナのことがあり、急遽3月末に日本に帰国しました。留学の途中で帰国を選んだことは苦渋の決断でしたが、今は教わっていた先生とオンラインでプライベートレッスンをしたりして、ロシア語の勉強は引き続き続けています。

とはいえ、急遽帰ってきたせいか、最近は家にいるとふと留学中のことを思い出すことがあります。中でも、寮での生活は色々な意味で思い出深く、あんなこともあったなあ、今懐かしく感じています。

私がいたリャザン大学の学生寮は、大学からマルシュルートカで10分ほどで、周辺には大きなスーパーも複数あったりと比較的便利な場所にありました。9階建てで、ロシア人も留学生も混合の大きな寮でした。ただ、留学生はある程度まとめられていて、私のフロアには日本、中国、台湾、アメリカの国々の留学生がいました。

正直、寮自体は設備・衛生面はあまり良いとは言えません。小さいゴミブリがそこら中にあるのは当たり前。私のフロアでは特に共同キッチンに多く、天井のゴミブリが鍋に入らないよう常に目を見張っていました。

洗濯は、寮の洗濯機が途中から急に使えなくなり、それ以降は手洗いでした。無になって洗濯する時間も意外と嫌いではなかったですが、シーツや冬のニットはよくためてしま

がちでした…。ただ、寮の洗濯機が修理できないのは「大学にお金がないから」とのことだったのですが、いつになっても復活しない中、突然寮の外壁にエセーニン（リャザン出身のロシアを代表する詩人）の大きな絵が描かれました。エセーニンはたしかに立派なのですが、「いや、まずは洗濯機…!」ときっと多くの学生が切実に思ったと思います。

他にもとにかくツッコミどころ満載の寮でしたが、そこで一緒に過ごした友達との思い出も忘れられません。

寮では、よく夜遅くに（おそらく誰かの喫煙などで）火災報知器が鳴りました。その際は全員が外に出されるため、寝ている時でもおかまいなしでしたが、外に出ると普段は会わないような友達にも会えたりもしました。ある時は真冬の極寒の中1時間以上も中に入れず、けれど終わった後、ロシア人の友達が部屋で夜食とチャイを出してくれて、それをみんな食べたのは温かい思い出です。

私のフロアのキッチンでは、中国や台湾の学生たちがいつも皆で仲良く料理を作っていました。しかも、皆それぞれが朝も夜もちゃんと本格的な中華料理を作っていて、よく私もごちそうになったのですが、それが本当においしいのです。私も台湾人のルームメイトによく料理を教わりながら、一緒に夕食を作りました。でもある時、中でも料理が上手だった台湾人の兄弟が「最初ロシアに来た頃はご飯の炊き方さえも知らなかった」と言っていました。中国や台湾の学生たちが、親元を離れてもちゃんと自炊をして、彼らがいかに食事を大事にしているかをリャザンのこの寮で学びました。

国際放送史研究の戯言No. 007

パスポート

島田 顕

外国人にとってパスポートは大事である。当たり前のことだが、外出する際は常に携帯しなければならない。パスポートにはビザがあり、ビザにはスタンプが押され、必要事項が記入されているスタンプ式のものがあれば、すべての内容が印刷され、それをパスポートの頁面に張り付けるシール式のものもある。私がロシアの声放送局に入局した1996年頃は、薄緑色の用紙に写真が貼られ、必要事項が記入されている分離式で、用紙には入国用と出国用の部分があり、空港の入国審査の際にそれぞれの部分が切り取られるタイプだった。短期滞在中は出国部分をパスポートともに携帯する。後にビザはシール式になったが、新たに入国出国カードというものができた。

加えて滞在のためには、レジストラーツィヤ（滞在登録）が必要で、ホテルに宿泊するときは数時間から半日預けなければならない、行動が制約される。後で用紙に滞在について印刷されるものを渡されるのである。

放送局入局後直ちに、長期滞在のレジストラーツィヤのために、局舎内のパスポート係のところへ赴き、分離式の出国部分のビザとパスポートを提出した。手続き中はパスポート不携帯となるので、代わりに手続き中であることを示す内容が書かれたプロブスク（許可証）を携帯することになった。約一か月後に係に赴き、スタンプ式のレジストラーツィヤが済んだパスポートが返却された。だが面倒な手続きは一年毎に行わなければならないかった。

放送局入局後間もない頃、モイセーエフ・バレエを見に行こうと先輩に誘われた。その先輩は10年以上もつとめていて、もちろんロシア語は堪能であった。モイセーエフ・バレエ団とも昵懇の仲で、招待券で見ることができるといった。

当日の夕方、先輩と一緒に宿舎を出てトラムで地下鉄駅についたら、警察官が寄ってきた。「パスポートを見せろ」と要求され、私は素直に見せたものの、先輩はもっていなかったために咎められた。先輩は堪能なロシア語で、長年放送局につとめていてパスポートを携帯したことはないと言った。それで解放されると思っていたら、一悶着の末、先輩は連行されてしまったのである。あまりにもゴネたためだろうか、羽交い締めにされて、バレエ団に手渡すためのお土産のビデオディスクを私に託して、車に乗せられてしまった。

その後私は一人きりで公演会場に必死の思いでたどり着き、先輩の知り合いのダンサーに楽屋口でお会いし、お土産を渡しチケットを頂いて客席に座ったのだが、気が気ではなかった。バレエの内容はほとんど覚えていない。上の空だ。約2時間後、公演が終わり早々に家路につく。心配だったけど、結局大丈夫だった。宿舎に近づいたら、先輩の部屋の窓の明かりが見えた。先輩の部屋を訪ね、どうなったのか聞いたところ、警察署に連行されたけどすぐに釈放され、帰宅したということだった。ホッと胸をなでおろした。

《モスクワ・アラカルト59》

ライラック色のモスクワ

日向寺 康雄

5月も半ばを過ぎ、コロナウイルス蔓延の勢いもひとまずピークを過ぎたようだ。初夏の始まりを思わせた陽気も一段落し、この頃(20日)は長袖シャツがいるようなひんやりとした日もある。モスクワから30年ぶりに戻って二年半、今でも折に触れあちらでの日々がふと思い出される。まして大学では対面授業はなく、自宅制作の動画をオンライン配信するだけ… ステイホームを守り一日中外出しないと、話をするのは(パソコン画面の)ロシア人ばかりで、日本語を話さない日もあるほどだからなおさらだ。

あちらでは今、ライラックが花盛りを迎えているという。今年赤の広場での軍事パレードは中止となったものの、航空宇宙軍による空中パレードだけは実施され、75機ものヘリコプターや戦闘機、輸送機が参加、いつものようにミグ29曲技飛行隊「ストリージ(あまつばめ)」がモスクワの大空にロシアの三色旗を描いた。そして戦勝記念日が終わり、満開のウワズミザクラが控えめで白いかわいらしい花びらを落とし始めると一時気温が下がる「花冷え」の時期を迎え、それが過ぎると、満を持したように一斉に薄紫のライラックが咲き始め、うっとり酔わせるような香りであたりを包み込むのだ。しかし画面の向こうから友人が、花房の重みで首を垂れる、中庭から手折ってきたばかりだという見事なライラックの枝を見せてくれたとしても、あのえも言われぬ、むせかえるような、官能的ともいえる妖しい甘い香りは決してこちらには伝わらない。



私が働いていたモスクワ放送局は、トレチャコフ美術館のすぐそばにあり、仕事が早く終わると時々、美術館内を散歩するという「古き良きソ連時代的な」贅沢な時間を過ごすことができた。なかでも私のお気に入りには小演奏会も催されるヴルーベリの間で、彼の傑作「デーモン」や「白鳥の王女」そして「ライラック」などの作品と素晴らしい時と空間を共有できるのは、まさに至福の喜びだった。1900年制作の「ライラック」には黒い衣装を身にまとったこの世のものとは思えない女性が描かれているが、花の精といった明るい輝きはなく(バレエ「眠れる森の美女」に登場するこの花の精は優しい善い魔女なのに)まるで幽霊のように生気がない。彼女は、華やかだが暗く残酷だった20世紀に対する不安の象徴だったのか、画家のその後の人生の悲劇を暗示する予言者だったのか、観る人によって感じ方は違うだろう。しかし彼女の眼差しは人の魂の奥底まで染み入るように届く。

こんな歌がある—「人生に幸せは一つ それを見つけ出すのが私の運命(さだめ) 幸せはライラックの中に生きている 緑の枝に その芳しい花房の中に 私の貧しい幸せが咲いている」(作詞E. ベケートワ、作曲C. ラフマニノフ)。ライラック色に染まったモスクワには5月も末になると、トーポリ(ハコヤナギ)の綿毛が淡雪のように舞い始め、日に日に昼が長くなって季節はじきに夏になる。

(元モスクワ放送チーフアナ、現在中大・早大非常勤講師)



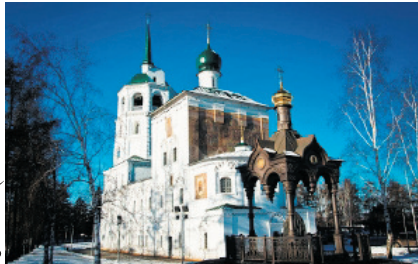
文化の街イルクーツク

オディネーツ・セルゲイ

イルクーツク木造要塞が建築されてもう359年がたつ。そして、来年は360周年になろうとしている。

イルクーツク要塞の目的は二つあり、一つは現地の住民から毛皮の貢物を受け取ること、もう一つは土地をロシア皇帝の影響下に置くということだった。そして次第に要塞は拡張し、街になった。イルクート川がバイカル湖から流れ出ているアンガラ川と合流点に建てられた街は「イルクーツク」(イルクート川の街の意)と名づけられた。

イルクーツク市の先住民は農家、コサック兵、流刑者などだった。その暗い時代にロシア国民の刑務地であったイルクーツク市の印象はあまりよくなかっただろう。実は、その時一般の刑事犯だけではなく、ロシアが誇った貴族(十二月党員=デカブリストという)も政治犯としてシベリア流刑に処された。この貴族たちのお蔭でイルクーツク市は単なる流刑地としてだけでなく、ウラル山脈と太平洋岸の間の広い土地で一番教育と文化が発達した街として有名になった。ロシア皇帝によってシベリアの受刑の制限は自由だったので、イルクーツクに住んでいた流刑者は市内を自由に歩き回ることができた。政治犯の貴族はそれ以外にだれもしなかった仕事をやりはじめ、街の医者、教官、俳優、画家、音楽家、建築家などになった。その時から我が街には学校、病院、図書館、劇場、美術館、博物館などがたくさん現われたと言われている。



スパスカヤ教会 (1710年設立)

現在、イルクーツク市は東シベリアの文化的中心地と呼ばれている。市民は楽しみながら街の文化生活に参加している。市内には美術館、博物館、図書館、映画館などがたくさんあるため市民はよく絵画の展覧会に行ったり、映画祭でロシアのだけでなく外国の映画を見たり、様々なコンサートに行ったりする。シベリアはアジアに近いのでアジア文化にも深い興味を持っている。最近、イルクーツク市では「祭り」という日本文化の日が行われた。その時、日本についてもっと知りたい人々が劇場に日本文化のパフォーマンスを見に行った。イルクーツクは日本からとても離れているにもかかわらず、日本に近い絆を持つ。なぜなら、19世紀までロシアの極東にあった街の中、バイカル湖の近くにあるイルクーツク市が一番大きかった。そこで、はじめて日本へ行ったロシアの探検家はイルクーツク市をロシアの出口として様々な準備のために使ったのだ。今でも驚くべきことだが、イルクーツク市と日本は時差1時間だけ。歴史にもイルクーツクは他のロシアの街より日本との交流経験がたくさんある。

現在、全世界にもイルクーツクにもコロナウイルスの問題があるけど、検疫を守ってくれる市民のお陰で短期間で病気の恐れがなくなるだろう。そうすると、また多くの日本人が文化の街イルクーツクを楽しむことが出来るようになる。

皆さんに是非イルクーツクに来ていただきたい。

ロシア料理視察ツアー

畔上 明

日本におけるロシア料理店の老舗「渋谷ロゴスキー」の顔として知られた長屋晃氏 (写真) が今年1月下旬に吐血、杏林病院で2月24日に眠るようにしてこの世を旅立たれました。

数年前に癌を克服された長屋さんはかつての旅仲間でもあるロシア料理研究家や写真家たちと共に年に2、3度気の置けない集いをもち、半年先に90歳を迎えられるそのお祝いをしようとして私達も楽しみにしていた矢先でもありました。

ご遺族にとっては、山となった名刺や写真の整理をつけることも出来ず、新型コロナウイルス騒動での自粛政策の中、納骨も役所とのやり取りもままならず、弔意を申し出る方々には丁寧にお断りをせざるを得ない状況とのことです。

2015年渋谷の再開発により「ロゴスキー」は銀座に移転しましたが、来年開店70周年を迎える歴史の中で、私にとっては50年前の20歳の誕生日を祝ってくれた大学の先輩がロシア料理とはどのようなものかを教えてくれた場所が「ロゴスキー」でした。以来、旅行会社での旅の説明会に利用させてもらったり、また結婚披露宴を催すなどの思い出の店でもあります。

1979年初夏、長屋晃氏が事務局長として、そして団長に「スングアリー」の加藤幸四郎氏、副団長に晃氏のお母様であり「ロゴスキー」創設と共に料理長として著書もある長屋美代さん、京都「キエフ」、札幌「アンナ」、福岡「ツンドラ」の経営者を始め40名近くの参加者により3週間に亘ってシベリア、中央アジア、ラトヴィア、ウクライナ、モルダヴィア、そしてモスクワ周辺部を巡る「日本ロシア料理店協会ソ連視察の旅」の添乗を私が務めたのでした。

当時の参加者との親交は時を隔てて更に深まり、長屋晃氏を囲み、時に神保町「ロシア亭」、或いは高



田馬場「チャイカ」、上野「マトリョーシカ」、大森「ロマーシカ」、吉祥寺「カフェ・ロシア」、新宿三丁目「スングアリー新館」、本郷「海燕」、浅草「ラルース」、そして、旅仲間が講師をするNHKカルチャー宇都宮教室での「ロシア料理」の昨年秋のイベントが長屋晃氏との語らひの最後となってしまいました。

長屋美代さんは軍人であったご主人からハルビンのレストラン「ロゴジンスキー」などで覚えたロシア料理の味を耳で聞きながらその調理を試みたのですが、ロシアでの視察ツアーの時に、本場の味を日本でもしっかり再現出来ていたという確信の言葉をおっしゃっていたことが深く心に残っています。その調理法を宇都宮で今に伝える活動を続けている方が、ツアーでの視察内容を克明に新聞記事に残し、時代の変化の中でもはや消滅してしまい伝説と化した「スラヴヤンスキ・バザール」、「ツェントラーリナヤ」、「アラグヴィ」、「ミーンスク」、「バクー」等のモスクワの視察先が思い出されます。ソ連での各レストランは日本からの専門家集団がやってくるということでコースごとの料理を何種類もサービス、参加者は写真を撮り一口味わってはメモを取り質疑応答に余念がなかったのですが、私は次々出てくる料理を幾皿も全てきれいに食べ、ツアー終了時には5キロも体重が増えてしまったことが旅の成果でした。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

長屋晃様には当協会でも色々とお世話になりました。渋谷の店舗を講演会に提供してくれたこともしばしばで、ロシア関係の様々な行事でお会いする度に楽しいお話を聞かせて下さいました。一昨年のロシア料理教室にも顔を出して下さいました。心からご冥福をお祈りいたします。(広報部)

今時、来日するロシアの人もいない。ロシアの報道をテレビやインターネットで見る限り、当然ながら、ロシア国内でも多くの人がマスクをしている。マスクを着用していない人に罰則もある。確か沿海地方は4千ルーブルもの罰金と報道されていたようだ。

日本の個人病院では待合室にスリッパなどが準備されており、土足の靴を履きかえることが多い。一方、規模の大きい総合病院などは、土足のまま病室や診察室に向かうのが普通であろう。ロシアの病院に行かれたことがある方は、ご存知のように、ロシアの病院の入り口には、バヒールウイ「Бахилы」という上履きというか靴カバーが山のように置かれている。不特定多数の人々が来院し靴底についているかもしれないウイルスや細菌が病院に運び込まれるのをまさに水際で防御しているのである。ロシアで病院に行くたびに面倒だなと思っていたが、公衆衛生上の観点からは、このルールが正しいのである。

ウイルスとの戦いはマラソンのような長期戦になるとのこと、人との距離をとる生活が、普通になってくるのかもしれない。非常事態宣言が出されている現在、外出自粛を求められ、ほぼ毎日自宅でパソコンに向かいテレワークやオンライン飲み会などがおこなわれている。インターネットなしには生活できない状況である。疫病のウイルスもさることながら、その上、パソコンのインターネット上のウイルスもでてくれば・・・、想像もしたくない。これはSF小説の世界にしておこう。

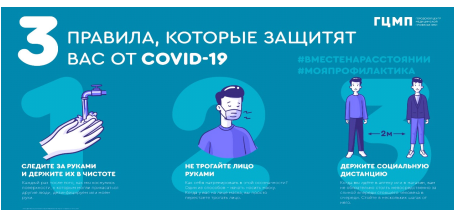
ロシア人もマスクを着用

大原 翔

新型コロナ・ウイルスの蔓延で、世界各国はその対応に苦慮している。後世の人々はパンデミックにて、生活様式の大きな変革がもたらされた年と2020年を呼ぶことになるのだろうか。早く終息することを祈るしかない。

ロシア人が日本に来て驚くことは多い。かつては(正確に言えば昨年まで)、その一つにマスクがあった。電車や会社で、マスクをしている人が昔から多い。来日したばかりのロシア人が、それをいぶかしげに見て、よく質問をうけたことを思い出す。曰く、「ロシアを含む欧米人は、マスクをつける習慣がない。医療関係者をのぞけば、普通のロシア人がマスクをする時は、何かの疫病が流行しているときぐらいのものだ。こんなに多くの日本人がマスクをしているのは、日本は疫病が、今、流行しているのか。」その都度、「疫病ではない。日本では、風邪や、花粉症対策などでマスクをするひとが少なくない」と私は、答えていた。

今年はまさに疫病の年になってしまった。今年はロシア人からそんな質問はさすがに出ないであろう。もっとも、現在、日口間の航空便が休止しており、世界は鎖国状態で、



(СанктПетербург市政府WEBより)